

5 動脈硬化症の一次（小児期）予防に関する研究

班 員 熊谷 通夫（都立小児病院 副院長）

研究協力者	佐々木直亮（弘前大教授 衛生学）	五島雄一郎（慶大教授 内科）
	若生 宏（岩手医大教授 小児科）	中村 治雄（慶大講師 内科）
	篠野 脩一（都立老人研 疫学）	藪内 百治（阪大教授 小児科）
	草川 三治（女子医大教授 小児科）	細田 泰弘（慶大助教授 病理学）
	大国 真彦（日大教授 小児科）	菅野 剛夫（慶大助教授 臨床化学）
	北川 照男（日大教授 小児科）	

欧米先進工業国において虚血性疾患が国民保健上の最大の課題の一つとなっていることは周知の通りであるが、過去20年間の我が国の本症増加の傾向をみると近い将来に同様の事態が我が国にも招来されることが明らかである。従来本症を成人の疾患として考えら対策がとられてきたが、本症の発症に関する要因の中で基本的且最大のものである動脈の粥状硬化症の発生、進展、成立の過程は乳幼児期を含めた小児期に始まることが明らかにされている。又近年欧米諸国において本症の発症年齢の低下傾向は若しくは動脈の病理変化が促進的に起きていることを示している。これらのことから現在は虚血性心疾患の発症予防阻止は小児期を措いては考えられないとされ、WHOの報告にも従来の成人を対称とした予防対策は“PUT THE CART BEFORE THE HORSE”と批判している。しかし乍ら家族性にみられる特殊な場合を除いて本症が小児期に発症することが稀なために一般の関心が甚だ低いことはまことに残念である。欧米においてすらこの10数年間によく系統的な疫学的、臨床的データが集積されつつある現状で、我が国にはこの点皆無に等しい現状である。ようやく昭和50年度に厚生省心身障害研究の一部として小児慢性疾患研究の中に“動脈硬化症”の一次予防に関する研究班が設置された。

研究計画。1) 日本人小児の血液脂質測定。2) 日本人小児高脂血症の疫学的臨床的研究。3) 日本人小児の血圧、皮厚、身長、体重及び食事と血液脂質の研究。4) 日本人小児の動脈壁の病理組織学的研究。

研究報告。昭和50年度及び昭和51年度の研究成果報告を以下各協力研究機関別に述べる。

↓ **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

欧米先進工業国において虚血性疾患が国民保健上の最大の課題の一つとなっていることは周知の通りであるが、過去 20 年間の我が国の本症増加の傾向をみると近い将来に同様の事態が我が国にも招来されることが明らかである。従来本症を成人の疾患として考えら対策がとられてきたが、本症の発症に関する要因の中で基本的且最大のものである動脈の粥状硬化症の発生、進展、成立の過程は乳幼児期を含めた小児期に始まることが明らかにされている。又近年欧米諸国において本症の発症年令の低下傾向は若しくは動脈の病理変化が促進的に起きていることを示している。